

「在る愛の夢」

いしざわみな

日刻々 2025再演ツアー上演バージョン

○登場人物

木野ミミ(きのみみ) 妻 二〇〇九年現在、四十二歳

木野 学(きの まなぶ) 夫 二〇〇九年現在、四十五歳

【第一場】二〇〇九年・春

夫婦が暮らす家。水曜日の夜。

離れのように建てられた一階に一間、二階に一間の一軒家。間取りは、一階は六畳と二畳ほどの台所、階段の手前にユニットバスがある。縁側に向かって全面ガラス窓、縁側の先には隣に住む大家の家庭菜園があり、その畑の先に二階建ての家がある。

これらはイメージとして把握すればよく、具体化しなくてよい。
舞台には三つの空間がある。

夫婦の生活スペースである一階の部屋。二階の仕事部屋には、机とパソコンとキーボード。

もう一つは、向かいの家の二階の窓の外の柵に、液体の入った二リットルペットボトルが数本並んでいる。この空間は、場面によって照明が当たり映しだされる。

*

携帯電話が鳴っている。

木野ミミ、発信元を確かめ電話に出る。

ミミ ……うん……大丈夫。ちょっと横になってただけ。起こしてくれてよかった。——うん日曜日、大丈夫？ ——うん、こっちを十一時に出る予定だから、十一時半には着くと思う。車だとすぐ近くで、空いてれば十五分かないって言われた。——ホント？ 助かる！ ありがとう！ ——木野さんはねえ…… もうやけになっちゃって…… どうにもならない。——うん、話したの一週間前。夕方はいなくて、私が寝たころ戻ってくるし、二回くらいすぐ酔ってからんできた。——そう…… まともな話ができないの。——わからないけど…… 引越してからゆっくり考えるよ。——荷物少ないよ。木野さんが協力してくれたらすぐ片付くんだけだね。——置いてくよ。テレビも冷蔵庫も洗濯

機も。——アンプとスピーカーとヘルシオくらいかな。あとせめて「Mag」は欲しいんだけど…… とりあえず文字入力できればいいから。——ありがとう。——金曜日は有給もらった。うん、一日だけ。そうお給料減るから。——引越し祝い？ もらえるの？ ——そうなの！ 実用性重視！ ——炊飯器はもう買った。——うん、死ぬかもしれないよね。言われたよ、死ぬって。君が出て行ったら死ぬって。——怖いよ。怖いけど（大きく息を吸って吐き出す）もう祈るしかないよね。（「仮に死んだとしてもミミのせいじゃないよ、そう思っちゃだめだよ！」と言われる）わかってる。うん、ありがとう。

木野学が帰って来た気配がする。

ミミ 帰ってきた！ じゃ日曜日に。またメールするね。

木野、入って来る。

痩せていて顔色が悪く、足元がふらついている。

怯えた猜疑心の強い目つきのなかに、知的でユーモアのある優しい人柄と弱々しい視線が見え隠れする。

木野 まだいたんだ。もう出て行っただかと思ったよ。

ミミ 日曜日だよ。言ったよね？ 日曜日の十一時に引越し屋さんが来るから。

木野 ……（何かを言いかける）

ミミ ね、「Mag」は持つて行つていい？ ノートはダメでしょ？ なにか書けるものがないと困るから…

木野 エンピツで書けば？ そもそもあなたアナログな人なんだから。

ミミ ……。

木野 いいよ、持つていきなよ。でもプリンターないと印刷できないけど、どうする？ プリンターはないと俺も困るしなあ。

ミミ いいよ。そのうち買うから。

木野 でも困るでしょ、コンクールに応募するときとか。「USBメモリーに入れてキンコーズとかで印刷す

るって方法もあるけど、わかる？

ミミ (首を横にふる)

木野 あなたには無理か。水もらえる？

ミミ ミネラルウォーター買ってこようか？

木野 水道でいいよ。

ミミ、水を汲んでくる。木野、差し出された水を飲む。

木野 ありがとう。

ミミ お酒、におうね。

木野 酒じゃないよ、死臭だよ。

ミミ え？

木野 変な臭いしてるらしいんだよ、おれ。ほらこの前の花見のとき、キノさん変な臭いがするって話してるの聞こえちゃったんだよね。ちよつとヤバいんじゃない？って。確かにヤバいんだけどさ。キャッチボールも出来なくなってたもんなあ…… 風に吹かれてるみたいって言われてたけどさ、ほんとに飛ばされそうだったんだよ。

ミミ ……。

木野 モリオ、憶えててくれるかな…… 大人になって、黄色い顔の死にそうなおじさんとキャッチボールしたって、思い出してくれるかな？

ミミ 思い出すよ。きつと憶えてるよ。

木野 だといいなあ。

ミミ どこで飲んだの？

木野 図書館の前のベンチとか。サミットの前のベンチとか。やっぱりスーパーの前はいいよね、足りなかったらすぐ買えるし…… 金ないの知ってるでしょ。大丈夫、職質されるのは慣れてますから。勤め人じゃないから会社に連絡されることもないし、うつ病で肝硬変で働けないのにヨメが出て行きそうなんですよーなんて話すと優しくしてくれるお巡りもいるからね。あいつらに同情されるようじゃ、おれもお終いだよな。

ミミ ————なんで？　なんでそうなるの？

木野 （欽ちゃんの口真似）なんでそうなるの！

ミミ 吹っ切れたみたいだって言ってたじゃない？　もう大丈夫だから安心してって言ってたよね？

木野 いつの話？

ミミ 病院で。入院してる時。

木野 入院してる時のいつ？

ミミ 一昨年のお正月。レイコさんやキョウコちゃんがお見舞いに来てくれて、そのあと二人で：

木野 ああ！　窓から富士山見えて、みんなが無邪気に盛り上がったときね。

ミミ ……。

木野 まあ俺も富士山見えてきれいだなって感動して調子のいいこと言っちゃったんだな、これが：

ミミ 肝臓は元に戻らないんだよ。

木野 沈黙の臓器だから。

ミミ そうやってどんどん寿命縮めてるんだよ。

木野 わかってますよ、あの病院の肝硬変発症最年少記録って言われたもんな。おれ、すごいな！

ミミ 食道も胃も静脈瘤が破裂して何度も出血したんだよ。もうちよつとで死んでたんだよ！

木野 いっそ死んでたらよかったよな。そしたら君だってさっぱりしたのにな。

ミミ どうさっぱりするの？

木野 相続放棄して借金もチャラになって。おれの親の面倒とかみる気もないだろうからさっさと籍も抜

いてさ。すつきりさっぱりできたのにな。まあ、君の兄貴も父親もお母さんもめんどろな人たちだか

ら、それだけでも十分大変だろうけどさ。

ミミ （堪えて）福岡には連絡してくれたの？

木野 ……。

ミミ わかった、やっぱり私から電話するね。

木野 それは止めた方がいい。

ミミ だって木野さん、かけにくいんでしょ。

木野 そりゃあかけにくいですよ。でも君嫌われてるからさ。

ミミ ……。

木野 気にするな、君のせいじゃない。

木野、二階へ行こうとする。

ミミ 写真のデータはできた？

木野 結婚式のだっけ？

ミミ ……ニューヨークの。

木野 オーケー、今からやるよ。

ミミ お願いします。あとね、ノートにしか保存してない戯曲があつて…

木野 万が一間に合わなかったら送るから、引越し先の住所教えといて。

ミミ ……。

木野 教えたくないか。どうせ君の友だちから、キノさんストーカーになるかも知れないから教えちゃダメ！ とか言われてんだろ。

ミミ すごい言われてる。

二人、笑い合う。

木野 じゃサキちゃんに渡すか送るかするから受け取って。

ミミ わかった。

木野 結婚式のはいらない？

ミミ いらない。

木野 残念だな。

木野、二階へ上がっていく。

やがて、机に向かい作業をする木野の姿が浮かび上がる。

ミミ 5年前、私は駅五つ先の友人のマンションに身を寄せました。おそらくもう戻ることはないだろう

という心境で、この家を出ました。2004年4月の終わりのことです。木野さんは泣きながら……
木野 なんかさあ、君、おれと結婚して楽しいことあった？ なんにもないよなあ？ そう思うと悲しくて……

ミミ なんにもくないよ！ 楽しいことあったよ！

木野 いつ？ どんなこと？

ミミ ほら、鳥山に住んだとき、シミズヤで青島ビールがすごく安くたくさん買って飲んだじゃない？

木野 そんなことかよー

ミミ ……よけいに泣かせてしまった。もちろん、楽しかったことは他にもたくさんあったのに、どうして青島ビールだったんだろう（小さく笑う）。——コールセンターの仕事は週五日、五時に仕事が終わって、六時前に最寄り駅に着きます。駅前のスーパーで夕飯の買い物をして、甲州街道を八分ほど歩いて、環八との交差点を渡ってすぐ右に小さな公園があります。近道になるその公園の脇の小道まで来ると、すうーっと涙があふれてくるのです。悲しいとか苦しいとか感じてるわけじゃなくて、むしろ空が青いとか葉っぱがきれいだなとか思っているのに、涙の壺を開けてしまったように涙はあふれ出す。次の日も、その次の日も、毎日毎日。

ミミ、一つの箱を開け、中にあった白い靴に目を留める。

あの日、あなたがあんまり泣くので、私はどうしても一人で出て行くことができなかった。じゃあ鳥山まで見送って！ 窓際の席から通りが見えるあの喫茶店でお茶を飲んで、それから別れよう！ そうして私たちは隣の駅の喫茶店でお茶をのんで、もう一度いっしょに改札をくぐった。あなたはまたポロポロ泣いていて、私はいけないかと思いつつも、二度と会えないわけじゃないんだから、サキちゃんちに行くだけなんだから！ そう言って、自分も涙が止まらなくて、こんなに別れるのが辛い二人が別れるのは間違っているんじゃないかと思えてきて…… でも戻っても出口はない、こうするしかないんだと自分の心に必死で言い聞かせて、あなたの泣き顔を無理やり振り切ってホームに駆け上がった。反対側のホームの一番端っこのベンチに座って泣き続けるあなたの姿を横目で追いながら、からだに引き裂かれるような痛みとともに、胸が高鳴るような高揚感があった。——幸せの高揚感。自分が確かに、間違いなく求められているという確信。必要とされているという幸せ。生まれて初めて感じ

た。幸せの高揚感。

木野、ふと立ち上がり、ベルトを外し、そのベルトで軽く首を絞めてみる。

恐怖と自嘲。

ミミ、白い靴ををしまう。

ミミ 私は気がつきました。この気持ちちが、この気持ちこそが、どんなに追い詰められても、色んな人からもう別れた方がいいと言われても、私を彼のところに縛りつけた。この気持ちこそが私が木野さんから離れられなかった理由そのものなんです。

【第二場】二〇〇七年・春 ふわふわと立っている

心療内科クリニックの一室。

木野、ここではミミの主治医カワイとして、穏やかな口調で彼女の話に耳を傾ける。

ミミ 病院の栄養士さんから退院してからの食事についての指導を受けて、私はとても張り切っていました。たぶん、食事制限のサポートを完璧にこなすという目標を持つことで自分を支えていたんだと思います。でもあの日、仕事部屋に隠してあった焼酎の紙パックを見つけて、退院してからも夫がお酒を飲み続けていると知って、とにかくここから離れなきゃいけないような気持ちになって、裸足のまま飛び出してしまったんです。ここにいちやいけない、ここから逃げないといけない、そう思って、どんどん走って…… 私そんなに走ったり全然できないんですけど、そのときはものすごいパワーが出て走れたんです。それまで見たこともないような速さで景色が通り過ぎてゆくのが見えました。どんどん走って、走って走って、気がついたときには二つ先の駅の、でも駅からだいぶ離れた住宅街にいたんです。

医師 それでどうしました？

ミミ 困りました。

医師 困るよなあ。

ミミ 辺りはすっかり暗くなっていて、道もよくわからなくて、そのころには足の裏も痛くなって…
医師 そうだろうなあ。

ミミ 心細くて、ものすごく彼に会いたくなりました。おかしいんですけど。

医師 それで？

ミミ 電話をしたくて、自動販売機の下を覗いて小銭を探しました。

医師 (笑って)よく知ってたね。

ミミ 子どものころ、したことがあったんです、そういう遊びを。

医師 見つかった？

ミミ 20円だけ。でも電話をかけても出なかったんです。途方に暮れて座り込んでいたら、その公衆電話が鳴りだしたんです！ 夫から電話がかかってきたんです！

医師 もしもし？

木野、白衣を脱ぎ、靴を探す。

やがて白い靴の箱を手にして交差点に立つ。

ミミ それで、タクシーで帰っておいでって、タクシーが通りそんな道を教えてくれて…… だいぶ時間がかかりましたけど、なんとかタクシーをつかまえて。タクシーに乗るとほっとして、あんなに辛い気持ちになって、あんなに走ってくたびれ切ってるのに、家に帰れると思うとほっとしました。甲州街道と環八の交差点の辺りに近づいてくると、ふわふわと立っている彼の姿が見えました。ふわふわと揺れながら、私の靴を持って立っていました。

木野 おかえり。

ミミ ただいま。

木野、箱のふたを開ける。

白い靴を見て愕然とするミミ、裸足のまま帰宅する。

木野、ミミの足を蒸しタオルで包み、擦り傷を刺激しないように注意して、優しく丁寧に拭く。そ

の温もりに混乱するミミ。

木野 血が出る。

木野、オキシドールを取りに行く。

ふとミミの目に何かが映り、その視線の先には向かいの家の二階の窓の柵があり、そこに並んだペットボトルをじつと見つめて居る。

木野、その姿にヒヤリとし注視する。

ミミ ねえ、また増えたと思わない？

木野 そうかな……

ミミ 大家さんの息子さんね、その畑で取れた野菜、ぜったい食べないんだって。

木野 繊細なんだね。おれたち喜んで食べてるよな。

ミミ あれ、いつ捨ててるんだろぅね？ ここに十年住んでるけど遭遇したことないよね、捨ててるところ。

木野 トイレに捨ててるんじゃないの？

ミミ トイレに捨てるんなら、最初からトイレに行くんじゃない？

木野 面倒なんだよ。あのオヤジ、たいてい酔っぱらってるし……

ミミ 酔っぱらってるのにペットボトルに入れられるってスゴイよね。

木野 確かに。

ミミ、まだペットボトルをじつと見つめている。

そのミミを不安そうに見つめる木野。

木野 ミミ、ごめんな。

ミミ ……。

木野 ほんとうにごめんなさい。

ミミ ……。

木野 おれ、酒やめるよ。

ミミ ほんとに？

木野 やめる。

それは何度も何度も繰り返されてきた会話である。

木野 やめるよ。今度こそ。

ミミ 怖い。こんなこと繰り返してたら、私ほんとうにオカシクなっちゃうじゃないかって。もうオカシイのかも知れないけど……。今度またあの時みたい……あの時みたいに寝たきりになったら、もうほんとうに、今度は戻ってこれないかも知れないと思うの。

木野 大丈夫。そんなことにはならないよ。

ミミ どうしてそう言えるの？

木野 ……。

ミミ あの時だって、サトウくんがあんなふうにならなかったらどうなってたかわからないんだよ。サトウくんが突然死んで、結果的にはショック療法みたいによくなったけど……。今になってよくわかる。自分がとても危険なところにいたんだって。

木野 ——もしサトウくんが死んでなかったとしても、きみは元気になってたよ。もっと、ずっと時間がかかったかも知れないけど、でも間違いなく回復してる。俺にはわかる。

ミミ (木野を見つめている)

木野 やめるよ。約束する。

ミミ ほんとに？

木野 ほんとに。

ミミ お酒さえやめてくれれば、いっしょにいられる。お金のことはなんとかあると思うの。なんとかするから。私は元気になれば働けるし……

木野 (うなづく)

ミミ 木野さんといっしょにいたい。

木野 うん。

ミミ (泣きそう) 木野さんがいないと、私また一人ぼっちになっちゃうんだよ。ほんとうに一人ぼっちなんだよ。誰もいないんだよ。

木野 そうだよな。ごめん、悪かった。ほんとにごめん。

ミミ (うなづく)

木野 着替えておいで。冷えただろ？

ミミ うん。

ミミの姿が消えると、木野、待ちかねたように、隠しておいた焼酎を取り出して飲む。

木野が焼酎を隠し終えたところに、ミミが戻って来る。

木野、ミミが着替えていないことに気づき、「どうした？」と声をかけようとした瞬間――

ミミの手にある紙袋に気づいて、凍り付く木野。

ミミ、力が抜けたように座り込む。

紙袋から、チューハイやハイボールの空き缶が転がり落ちる。

ミミ (微笑みかけ) 大丈夫よ。今日はもう走れないから。

辺りがゆっくりと薄暗くなるとともに、向かいの家の二階の窓が映し出される。液体の入ったペットボトル、闇夜の月のように輝いている。

【第三場】二〇〇九年・春

やかんが沸騰する音。

夫婦が暮らす家。金曜日の朝。

柔らかな五月の朝の日差しが、体を丸めて眠っているミミの姿を照らし出す。

ミミ、珈琲の香りに目を覚ます。

木野 おはよう。コーヒ―淹れたけど飲む？

ミミ 〈戸惑いつつ〉ありがとう。

木野 牛乳いれるよね？

ミミ 入れる。

木野 たっぷり？

ミミ たっぷり。

木野、カフェオレと一緒に、食べやすく切ったベーグルを載せた皿をミミの前に置く。

ミミ (驚いて) ベーグル！ どうしたの？

木野 上北沢にできた新しい店。知ってた？

ミミ 買ってきてくれたの？

木野 いやなら食べなくていいけど。

ミミ 食べる食べる。ありがとう。

ミミ、ベーグルを頬張り、カフェオレを飲む。

ミミ (喜んで) レーズン入ってる。

木野 思い出すな。たしかにニューヨークで食べたときは美味いと思ったけどさ、君があんなにハマるとは思わなかったよ。――俺たち、金ないのにけっこうあちこち行っただけ。

ミミ そうだね。

木野 どこが良かった？

ミミ ――門司。

木野 門司かあ…… 跳ね橋みながら飲んだビール、美味かったなあ。

ミミ 美味しかった。

木野 ここに住みたい、ここで暮らせたらいのについて言ってたよね。

ミミ のんびりしていい町だった。ちよっとマカオみたいで。

木野 みやげものの店で時給いくらか聞いてたよね？

ミミ 水のある風景ってあきないよね。

木野 小樽もよかったね。

ミミ 小樽ホテル、なくなっちゃったね。

木野 運河見ながら飲んだビールが美味かった。そうだよ！ 北一硝子の店でも聞いてたよ。
ミミ なにを？

木野 だから時給。あなたいつも聞くんだよ。旅先で。時給とか家賃とか… 子育て支援とか高齢者対策とか……

ミミ 函館もよかった。すべてが真っ白になって遭難するかと思ったけど。きれいだったな、ユトリロみたいで。

木野 函館は地ビールが美味かった。

ミミ あの店！ 地ビール買って帰ろうとしたら、止めた方がいいって……

木野 遠くに運ぶとまずくなるって言われて…… また来ればいいって。
ミミ 商売つけないマスターなのね。

ミミは、さわやかな朝の楽しい夫婦の会話に、自分はほんとうに明後日引越すのだろうか？ あれは夢だったのではないかと感じる。

ミミ —— 木野さん、昔からお酒強くて全然酔わなかったから、急激にからだ悪くなって、びっくりしたよ。

木野 ごめん…… あなたは全然飲まなくなったね。

ミミ だって…… 私飲むと木野さん飲みたくなるでしょう？

木野 まあね。

ミミ どっちにしても飲むか。

木野 君は、旅に出るといつもすぐ元気だったね。

ミミ 東京が好きじゃないから……

木野 未だにスクランブル交差点で混乱するしな。

ミミ むかし木野さんの取材に便乗してあちこち行って、木野さんは本気になってなかったけど、あたしは

本気でどこかへ移り住みたかった。そういうきっかけを探してた。ずっと。

木野 ……。

ミミ ここに越す時だって、ほんととはもっと郊外にしたかったけど、23区じゃないと仕事取れないとか言うから…… 今さら話してもしょうがないね。——ごちそうさま。

木野、立ち上がろうとするミミを制して皿を受け取る。

木野 今日とか明日とか、誰が手伝いに来るの？

ミミ 誰も来ないよ。

木野 どうして？

ミミ みんな、つらいと思うから。

木野 そうか…… そうだな。

木野、ミミに『海辺のカフカ』の本を差し出す。

木野 これ持っていきなよ。

ミミ いいよ。

木野 ほんとは大橋さんのリトグラフあげたいけど……

ミミ いいよ！ 木野さんのたった一度のボーナスで買ったんだもん。

木野 ほんとうに一生に一度のボーナスだったな。もっと続けられればよかったんだけど…… あの社長には耐えられなかった。ごめんな。

ミミ 具合が悪くなったら意味ないよ。

木野 ——夫婦で絵を買いに出かけるって、なんて贅沢で幸せなことだろうって、あのとき思ったよ。

ミミ ワクワクしたね。他にはないワクワク感だったね。

木野 持って行きなよ。ちょうど一年前くらい？ やっと本が読めるようになって、あなたこればかり読んでたじゃない。

ミミ 元気になるから。

木野 やっぱ四国へ向かう話だから。
ミミ そうかもね。

木野 高知の山の奥にも行くしね。
ミミ うん。

木野 父親殺しの話だしね。
ミミ ……。

木野 ごめん、今のは失言でした。

ミミ ……殺したいと思ってたよ。昔はね。どっちが殺すかお兄ちゃんと相談したりしてたもん。
木野 (苦笑) 兄貴やりかねないからな。——座布団ぜんぶ持つてく？

ミミ 座布団？

木野 もともと君のだから申し訳ないけど、少し置いていってけるとありがたい。
ミミ いくつ？

木野 二枚。横になるからさ……

ミミ 枕の分も入れて三枚置いてく。

木野 助かる。

ミミ ごはんの後は、必ず横になるようにしてね。先生に言われたでしょう？
木野 わかってる。

ミミ その座布団は父が買って持ってきたの。結納の時、六枚セットで。

木野 ふざけた人生送ってるくせに、ところどころ妙に折り目正しいよな、あの人は。
ミミ ——木野さんが緊急入院したときね、

木野 うん。

ミミ その前にもう別ようって決心してたんだけど……

木野 その前って、いつごろ？

ミミ 夏の終わり…… 秋の初めくらいかな。

木野 二〇〇六年だよな？

ミミ そうだね。

木野 君が会社にも行かずに書き続けてたときだ。

ミミ ……父親に言われたの。

木野 なんて？

ミミ こういうことになったら別れるというのは酷なんじゃないかって。九死に一生を得たんだから、さすがに学くんも変わるだろうしって。夫婦でいてもいいんじゃないかって。

木野 心外だな。

ミミ 同情したのかな？

木野 最悪だな。

間。

木野 ウエディングドレスは置いていくなよ。

ミミ ……。

木野 持ってつても困るか。次は同じの着れないもんな。

間。

木野 あのさあ……

ミミ やっぱりニューヨークかな。

木野 え？

ミミ 一番よかったのはニューヨークだね。

木野 そうだね。

ミミ びっくりしたよね。なんであんなに元気になっちゃうんだろう？

木野 なんてかな。日本では瀕死状態だったのにな。

ミミ 魔法みたいだったね。

木野 うん。

ミミ 街を歩いてるだけで楽しくて。

木野 うん。

ミミ 木野さん、急に英語しゃべりだして…

木野 あなたはほとんど日本語なのに、妙に通じるんだよな。

ミミ 絶対必要なことは憶えてたよ！

木野 今日のチケットはありますか？

ミミ Are todays tickets still available?

木野 イサムノグチ美術館には、どう行けばいいですか？

ミミ How can I get to Isamu Noguchi Garden Museum?

木野 よくできました！

ミミ Does this go to Ground Zero?

木野 ……。

ミミ ずっと聞きたかったことがある。

木野 うん。

ミミ グラウンドゼロに行ったときのこと。憶えてる？

木野 二〇〇二年だね。

ミミ あのと、私たちに声をかけてきた記者さんがいたでしょ？

木野 たぶん中東のね。

ミミ 私、よくわからなかったけど、あのひと私たちに何か尋ねてきて、木野さんが応えたら急に口調が激しくなって…… 木野さんも言い返すみたいな感じになって。私怖くなって、アイムソーリーって謝って木野さんを引っ張って…… あの人、なんて聞いてきたの？

木野 ……。

ミミ あの人ね、怒ってたと思うけど、すごく哀しい目をしてたの。木野さん、なにを言ったの？ どうしてあんなに怒ってたの？

二人、記憶のなかでグラウンドゼロに立っている。

木野 ——俺の魂は、あそこにあるような気がするな。

木野、出て行く。

ミミ、一つの箱を開ける。現れたのはウェディングベールとブーケ。

【第四場】一九九四年～一九九六年 穴の開いた小舟に乗って外海へ漕ぎだす

一九九四年・晩秋。

柔らかな木洩れ日揺れる樹々の影。

蝶ネクタイを身に付けた木野が登場し、正面に向かって深く一礼、そこに集まった人々の顔を見渡す。

木野 —— えー今さらですが木野学です。本日はお忙しい中、ここに参列くださいましたこと、深く御礼申し上げます。先ほどマイクのテストをしていたら、手洗いはどこかと尋ねられまして、顔を見たら十年ぶりに会う父方の叔父でした。このスタッフと思われたようです。皆さまには、受付で一人お一人に今日の立会人としてサインをしていただきました。ありがとうございます。本日は、人前式での結婚式を行います。仏様でもキリストでもなく、皆さまに結婚を誓い、新しい一步を踏み出したいと思います。なにぶん私たちも初めてのことで色々と至らない点もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。六月に結納をしたんですけど、彼女のお父さんが、木野ミミっていうのはおかしいんじゃないかってばやいてまして…… すみません、とくに落ちもないんですけど。それでは、私の妻となるミミをご紹介しますと思います。

ワグナーの結婚行進曲のピアノが聴こえ、ベールを付けブーケを持ったミミが、緊張した面持ちで登場する。

ミミは木野の横に並び、二人で「結婚誓約書」を読み上げる。

木野・ミミ 私たちは、本日ここで、参列された皆さまを証人として、結婚することを誓います。この先の長い将来、病めるときも、健やかなるときも、夫婦としてお互いにお互いを支え、励まし、一番の味方となって、二人で幸せな人生を過ごせるよう、努力を重ねてゆくことを誓います。一九九四年十

一月三日。

木野 木野学。

ミミ 岡本ミミ。

木野とミミ、挨拶しながらゆつくりと去り、ミミ一人だけ椅子に座る。
そこは、花嫁の控室。

木野、ここではミミの母親として入って来る。

母親 あんた、お兄ちゃん礼服やないで。ふつうの背広で来ちゅう…… あの子、礼服持っていないろうか？

あんたなんでもいっしょに借りちゃらんかったあ。

ミミ ちゃんと持つてるよ。わざとでしょ。

母親 ……

ミミ いいよ、堅苦しくない式なんだから。

母親 けんど向こうは親戚の人らもおるし、見る人は見るぞね。

ミミ 木野さんの妹さんだってワンピースだったでしょう？

母親 あんた、あれはミュウミュウで！

ミミ なにそれ？

母親 プラダの妹みたいな。

ミミ プラダって妹いたんだ。

間。

母親 お父さん、お祝いくれた？

ミミ もらえると思つてないよ。

母親 (呆れて) おじいちゃんに頼めばえいにねえ、娘のために頭下げられんろうかねえ…

ミミ おじいちゃんからはお祝い届いたよ。

母親 なんぼ？

ミミ 十万円。

母親 あんた少し融通してくれん？

ミミ (警戒しつつ) 飛行機代と着物レンタルと着付けと美容室と、その帯揚げでもう十万円以上かかったからね。

母親 あんたが買うてくれたこの帯揚げはえいけど、着物が安物やけんねえ…… 向こうのお母さんの留

袖、古いけど格が高いわ。黒の深さが違う。あたしもえいがを持ちちよったけんねえ……

ミミ 質屋で流したきねえ。

母親 他にもお祝いが入るろう？

ミミ それは式の費用になるがやけん。

母親 費用は木野さんところが出するろう？

ミミ うちは一銭も出してないがで。ようそんなことが言えるでね。

母親 いったんは木野さんの親に借りるけんど費用は自分らあで出すがやろう？ あんたそう言いよったでねえ？

ミミ ……。

母親 まあ、また後で相談するわ。

母親、出て行く。

ミミ、不安な面持ち。

木野、入って来る。

木野 どうした？

ミミ お母さんが…… お金貸してって……

木野 (笑って) 今回は大人しいかと思っただけど、さすがお母さんだねえ。

ミミ 絶対返ってこん。

木野 後で相談しよう。俺から話してもいいし。

ミミ 貸して欲しかったら返してから言え！

木野 大丈夫、ずっといるわけじゃないんだから。二、三日したら帰るんだから。何とかなるよ。

ミミ (間あって) もう木野ミミだもんね！

木野 そうだよ！ 新型ミミだよ。

ミミ やったー！

二人、抱き合う。

ミミ、参列者に語りかける。

木野、蝶ネクタイを外し、煙草を吸い始める。

ふと気づくと、結婚行進曲は変調し、やや落ち着かない旋律になっている。

ミミ 皆さま、今日は本当にありがとうございました。ここでご紹介させていただきます。今日私が着ているウェディングドレスは、中学からの親友、森サキ子が製作したものです。一緒に生地を買いに行つて、デザインして作ってくれました。サキ子、ありがとう！ それから、先ほどの式でピアノを弾いてくれたのは、私の劇団でいつも音楽を作ってくれているミヤモトマコトくんです。ミヤモトくん、ありがとう！

ミミ、白い靴を脱ぎ箱にしまう。

木野、煙草を吸っている。

ミミ ——木野さんは子どもを欲しくないと云った。

木野 子どもは嫌いじゃない、むしろ好きだよ。でも自分の子どもは欲しくない。

ミミ どうして？

木野 自分のことが嫌いなんだよ。憎んでると言ってもいい。自分に似ている子どもを見るのは耐えられない。

ミミ でも……でもお正月福岡に行ったとき、子どもの名前の話してたよね？ 木野さんが、女の子だったら木野サクラにしようって云ったらお父さんが本気にして怒って…… 木野ミキとか、木野タクミとかみんなで盛り上がったたよね？

木野 あれはまあ、世間話としてどうか。

ミミ(心の声) ふざけんじゃないわよ！ 何だよそれ——それでもあたしは諦めなかった。

ミミ でもさ、あたしそっくりの子どもが生まれる可能性もあるよね？

木野 (微笑) それはいいな。

ミミ、ベールを外し箱にしまう。

ミミ ——木野さんは、ときどき死にたくなるのだと言った。

木野 自分なんか消えてしまった方がいいと思う……と言った方がいいかな。

ミミ ……自殺しようとしたこと、ある？

木野 それはない。

ミミ (安堵する)

木野 駅のホームで電車待つてさ……

ミミ うん。

木野 電車が入ってくるアナウンスが聞こえて、いつの間にか…… いつの間にかからだは線路の方へ向か

つてることがあるんだよね。自分でもびっくりするんだけどね。

間。

ミミ ——うちの自殺した伯父の話、憶えてる？

木野 お父さんのお兄さんだよね。いつだったけ？

ミミ 私が中三のとき。

木野 お父さん、全然驚かなかったって言ってたよね。

ミミ 何度も未遂してたから、いつかやると思ってたって。

木野 お父さんのお姉さんもだったよね？

ミミ 大学三年のとき。

木野 やっぱり驚かなかったの？ お父さん。

ミミすごい落ち込んだ。

木野 へえー

ミミ(心の声)早く言えよ！ 何だよそれ——それでもあたしは恐れなかった。

ミミ 今度消えなくなったらさ、二人でぴたりくつついて、それが過ぎ去るまで待てばいいんだよ。ね、そうしよう！

木野 ありがとう。

二人、横になる。

ミミ、当然のように木野の胸の中におさまろうとするが背を向けられてしまう。
夜が更けていく。

天

木野 そこに共通性はあるのかな？

ミミ ……？

木野 自ら死を選んだ伯父さんと叔母さんについて。

ミミ ——わからない。

木野 わからないよな。

ミミ わからないし、不用意なことは言えない。

木野 うん。

ミミ でも、三人兄弟で二人が自ら死を選ぶことは、何らかの意味があると思う。

木野 うん。

ミミ 人生に対する諦めと復讐…… みたいなものがあるのかも。

木野 なるほど。

ミミ 人の死に理屈つけちゃいけないんだけど。

木野 あきらめとふくしゅう。

ミミ 復讐…… は言い過ぎかも知れないけど。

木野 そういうことかもな。

ミミ ……？

木野 君のお父さんは死ぬことを選ばなかったけど、酔っぱらってお母さんにひどい暴力をふるい続けるという形で…… いちばん大切な人を痛めつけるという形でそれが表れた…… というのかもな。

ミミ 母もあんなに耐えなくてもよかったのね。もっと早く見切りつけてたら、また別の人生があったかも知れないのに…… むかしは母のことが好きだったから、父親に殺されるんじゃないかって、毎晩ほんとうに不安だった。

真夜中の静寂。

木野、静かに起きだし、身支度をする。

ミミ そこまでしておけばよかった。そう、死にたくなるときがあるんだね。つらいよね。私は死なないで欲しいと思ってるよ。それを忘れないで。そう伝えるだけにしておけばよかった。どんなに不安でも、どんなに怖くても、家で待っていればよかった……。

木野、出て行く（まだ姿は見えている）。

ミミ、起き上がる。

木野の姿、消える。

ミミ、飛び起きて脱兎のごとく駆け出してゆく。

【第五場】 一九九六年～一九九八年 さまよえる魂

一九九六年・秋。

木野、夜更けの幹線道路を歩いている。

やがてミミが現れ、木野の姿を見つける。

ミミ、少し離れて後をつけて歩く。

ミミ 伯父は、生まれ育った土地の山へ分け入って、自らの手で自らを殺した。その木にぶら下がった伯

父の肉体を見つけたのは伯母で、彼女は自分の手で夫の体をその木から下ろした。伯父の鼻からは大量の鼻水が放たれていて、生きていた証とも言えるその鼻水を、自分が拭ったのだと話してくれた。

甲州街道の歩道橋の上にたたずむ木野と、その姿を見つめるミミ。

ミミ 伯父が最後に選んだ木は、どんな木だったのだろう。栗の木なのか、楠の木なのか、それとも桜の木なのか。この辺りには首を吊りたくなるような木はない。もしも… もしも木野さんが自らを殺してしまうとしたら、どんな方法をとるだろうか。

木野、再び歩き出し、ミミはその姿を追ひ、二人は闇に消える。

夜が明けてゆく。

ミミ、電話をかけている。

ミミ — お義母さん、すみません。申し訳ありません。私の力ではどうにも出来ない問題が起こってしまつて……。昨日、偶然大家さんの奥さんに会ったんです。そしたら家賃を六か月払ってないっていうんです。——それが、私は一度も払いに行ったことがなくて……。学さんが自分が払うからって、家で仕事してますし、払った？ て聞くと、いつも払ったって言うので全然知らなくて……。すみません。——はい。八〇万くらいです。——とりあえず、四、五日待ってくださいってお願いして……。はい、待ってくださいるそうです。——お義父さんですか？ はい、はい……。わかりました。

座布団が一枚置かれ、その向かいに二枚置かれている。

ミミ 翌日、福岡から木野さんのお義父さんが上京してきた。木野さんは罪を認め審判を待つ被告人のようになだれ、一言の弁明も口にできなかった。

木野、ここでは木野の父親として入ってきて、座布団に座る。

ミミ、木野が座っているらしい横に座る。

父親（封筒を差し出す）　じゃあ、これでいいね、学くん。

　　畳に額をつけるように頭を下げたらしい木野を見て、ミミも同じように頭を下げる。

父親　そんならビールでも買ってきて来ようかね。

　　父親、出て行く。

ミミ　それから私は仕事帰りに不動産屋を回り、なんとか木野さんがうんと言ってくれる家を見つけ出した。大正八年に巢鴨から移された6万坪の敷地面積を持つ精神病院のある駅から徒歩十分。甲州街道と環八の交差点から北西へ少し入ったところ、世田谷区と杉並区の境目にある小さな一軒家。隣には大家さん家族が住んでいた。ご夫婦と旦那さんのお母さん、中学生と高校生の息子さん。犬小屋にはトビーがいた。トビーは吉祥寺から大家さんについて来たという迷い犬で、木野さんによく懐いた。

　　木野、入って来る。

木野　また境目だな。

ミミ　……？

木野　世田谷区と杉並区の境目なんだよ、ここ。前のところは、世田谷区と調布市の境界線だったし。俺たちの大学の敷地も、東京都町田市の所と神奈川県川崎市の所が入り乱れてたし。俺たち、ずっと境界線にいるんだな。

ミミ　そうか、面白いね。あのね、これからのことで相談なんだけど。

木野　（身構える）

ミミ　一応ね、これからは私が、いちおう私が家計の管理をしようと思うの。今まで木野さんが家賃払って、私が食費とか光熱費とか払ってやってたけど、やっぱり、だいぶ切り詰めないといけないし。これからはギヤラが入ったら、いったん渡して……

木野 このままにして。ちゃんとするから……

ミミ でも……

木野 (怯えたように) 払うから！ 家賃はちゃんと払うから！

ミミ 違うよ！ そうじゃないよ。二人で払えばいいんだから……

木野 もう大丈夫だから！ ごめんな。

木野、出て行く。

ミミ それでも、私は一仕事終えたような気持で、ここからが本当の結婚生活だと思っていました。築三十年、一階に一間、二階に一間、このささやかなわが家で等身大の暮らしをすればいいのだと胸をなでおろしていました。

ミミ、仕事から帰宅する。

木野、入って来る。

木野 おかえり。

ミミ ただいま。今そこで大家さんに、トビーがご主人にすっかりお世話かけてって言われたけど何？

木野 今日カミナリすごかったじゃない？

ミミ うん。

木野 トビー、カミナリがすごい怖いみたいでさ。ちょうどみんな留守で、犬小屋で怯えて暴れてたの。

ミミ そうなんだ。

木野 怖がつて暴れてグルグル回るから鎖が体に巻き付いちゃってさ。

ミミ えー 痛いよ。

木野 ほどこうとしたんだけど雷が鳴るとまた暴れてどうにもならなくてさあ…… しょうがないから一緒に犬小屋にいたの。

ミミ 犬小屋に？

木野 うん、こうやって抱いてヨシヨシって。それが一番落ち着くかと思って。

ミミ たいへんだったね。冷蔵庫のコロッケって……

木野 大家さんからいただいた。そんなわけでビール買ってくるね。

ミミ コロッケだもんね。いつてらっしゃい。

木野 敢闘賞だな。

ミミ 来場所は三役を目指してください。

木野 オッケー！

木野、出て行く。

ミミ ————いいなあトビーは。

一九九七年・初夏。

真夜中の住宅街。線路脇の道を歩く木野と、その姿を追って歩くミミ。

ミミ 二十年前、棺に横たわった伯父の顔は、とてもきれいだった。やつれた風でもなく、痩せたようでもなく、歌舞伎の女形のように色白な、いつもの伯父の顔だった。でも私の頭に浮かぶのは、その最後に見た伯父の顔ではなく、見てもいない伯父が死ぬ瞬間の姿だ。死にゆく伯父の姿は確かなイメージとなって焼き付き、私は何度も何度もその映像を思い出して生きてきた。

公園の遊具の上にたたずむ木野。その姿を見つめるミミ。

ミミ 伯父は、いつその一本の木を決めたのだろう。自分の身を委ねるその一本の木。伯父はいつ、その木と出会ったのか。どうしてその木だったのか。それとも、そんなことはどうでもよく、たまたま選んだ木が、それだったのか。———木野さんは、いつ私だと決めたのか。どうして私だったのか……。

木野、駆け降りるように走り出し、ミミはその姿を追う。

二人は闇に消える。

夜が明けてゆく。

ミミ、電話をかけている。

ミミ お義母さん、ミミです。一昨日から学さんが帰って来てないんです。ずっと携帯にかけてるんですけど通じなくて…… — 急に友だちの家に泊まったりすることもあるかと思って待ってみたんですけど…… でも昨日も帰らなくて、連絡もなくて。 — 私は昨日は仕事に行きました。今日は休みを取って…… 警察に届けた方がいいでしょうか？ — そういう荷物は持っていないです。鞆もあります。 — お義父さんですか？ はい、はい…… わかりました。

ミミ、座布団を三枚置く。

ミミ 翌日、木野さんはお義父さんが上京してくる直前に帰って来た。

木野、ここでは木野の父親として入ってきて、座布団に座る。

ミミ、向かいにいらしい木野から少し離れて座る。

父親（封筒を差し出す） じゃあ、これでいいね、学くん。

畳に額をつけ頭を下げる木野。

ミミ、義父の顔と木野の様子を交互に見つめる。

父親 ミミさん、ビールはあるかね？

ミミ ビールですか？

父親 なけりゃあ買ってきてくれんね。

一九九八年・秋

明け方。ベンチで酒を飲んでいる木野を、ミミが見つめている。

木野、ふらふらと帰宅し横になる。

ミミも帰宅するが、休む暇もなく出勤の支度をして出て行く。ふたたび真夜中。酒を飲みながら歩く木野。

明け方。木野ふらふらと帰宅し横になる。

続いて帰宅したミミ、疲れ果てその場に眠りこんでしまう。やがてミミのからだは白い光に包まれていく。

【第六場】一九九九年〜二〇〇一年 絶望の淵でみえるもの

一九九九年・初冬。

ミミ、向かいの家の窓に並ぶペットボトルを見つめている。

ミミ 避難した方がいいんじゃない？

木野 ……。

ミミ もうすぐ飛んで来るんじゃない？ ここにいたら危険だよ。

木野 大丈夫、落ち着いて。

ミミ もうすぐだよ！

木野 ミミ、落ち着いて！ あれは裏のオヤジの小便が入ってるだけで、気持ち悪いけど、爆発はしない。

仮にオヤジが撒き散らしたとしても、その畑の肥やしになるだけで、家まで飛んできたりしない。

ミミ 飛んで来るよ。

木野 きみがそう思うのは、ずっとテレビを見ているからだよ。ふだんあんまり見ないのに、ここのとこ

ろずつと見てるから刺激が強すぎるんだ。テポドンニュースを見てそんな風に感じちゃったんだよ。

ミミ ……何もできないから…… 活字も読めないし手紙も書けない。家のことも… ぼんやりしてるこ
と

もできないんだよ……

木野 何かビデオ借りてくるよ。昔のテレビアニメとかもあるし…… 何がいい？ ムーミン？

ミミ — いつまでここにいるの？

木野 ……？

ミミ いつまでここに住むの？

木野 引越したいの？

ミミ こんなに長く住むつもりじゃなかったの。ともかく家賃の安い所に引越して、お父さんにお金返さなきゃと思ったから……

木野 俺は気に入ってるよ。大家さんもいい人だし、夜中に仕事してても隣に気をつかわなくていいしさ。でも夜もずっとうるさくて……

木野 まあ幹線沿いだからね。仕方ないよ。今は具合が悪いから、よけい気になるんだよ。感じやすくなってるんだよ。

ミミ ……。

木野 帰りにツタヤに寄って来るよ。

ミミ ……山ネズミのロッキータック。

木野 オーケー。探してみる。

二〇〇〇年・春。

ミミは終始不安感が強く落ち着かない。本を読んでみようとするが、活字を追うことができず、絶望的な気持ちになっている。

木野、買い物から戻り、紙パックのオレンジジュースを差し出す。

木野 買ってきたよ。とりあえず三個。あと一リットルのを買った。だいぶお得だから。

ミミ ……。

木野 小さいのがよかった？

ミミ (うなづく)

木野 一リットルは嫌なの？

ミミ (うなづく)

木野 一応、理由を聞いてもいい？

ミミ、なかなか言葉が出てこない。

木野 いいよ、ゆっくりで。

ミミ コップに移さないといけないから……

木野 うん。

ミミ こぼしちゃうかも知れないし……

木野 そうか。

ミミ 少しづつ飲んだと、ひっくり返すかも知れないし……

木野 そうだね。

ミミ どのくらい飲んでいいのかもわからないし…… わからないと不安になるし……

木野 そうだね、悪かった。じゃあ一リットルのは俺が飲むから。また小さいの買ってくるよ。

ミミ ……ごめんなさい。

木野 このオレンジジュースがいいんだ？

ミミ 前に飲んだとき、ちよつと楽になるような気がしたの。

木野 わかった。じゃあちよつと仕事してるから、何かあったら呼んで（出て行く）。

二〇〇〇年・秋。

ミミ、ある場所を目指して、一歩ずつ、必死で歩いて行く。

そこは、M病院の診察室。

木野、ここでは精神科の若い女医として入って来る。

女医 木野さん、その後どうですか？

ミミ つらくて…… とてもつらくて…… どうしていいかわからないんです。

女医 睡眠はどうですか？

ミミ 眠れません。でもいったん眠ると何時間も眠ってしまうんです。

女医 夢はみますか？

ミミ 夢見が悪くて……

女医 朝はいったん起きるようにしてくださいね。生活のリズムを作ることが大事です。

ミミ 目が覚めるのも怖いし、目が覚めないのも怖いです。たいいてい怖い夢をみて目が覚めます。

女医 じゃあまたお薬出しますね。

ミミ もうお終いですか？

女医 木野さんはこの病院に来るにはちよつと症状が軽いんですよね。

ミミ わかっています。でもここが一番近いんです。電車にも乗れないし、ここならなんとか歩いて来れるんで。

女医 通っていただいていいですよ。

ミミ どのくらい悪くなったら入院できますか？

女医 入院ですか？

ミミ やっぱり手首くらい切らないとダメですか？

女医 一回切ったくらいじゃあ……

ミミ やっぱり敷居が高いんですね。

女医 毎週運ばれてくる患者さんもありますから。

ミミ 毎週ですか……

女医 そんな気持ちになるんですか？ 手首を切りたくなるような？

ミミ 最近たびたび思い出す光景があるんです。そこに帰りたいなって…… 小さい頃、四万十川のほと

りに住んでいました。家を出て、トラックが走ると土ぼこりが舞う道を渡って、堤防への階段を登ったら四万十川が見えます。ある日、父がオートバイの後ろに私を乗せて河原を走ったんです。じやりじやりと石ころが広がる河原です。私は三歳くらいでした。オートバイがひっくり返って、私は石ころのなかへ放り出され、丸いお尻がポンと地面に着きました。父は慌てる様子もなく、ぼんやりとしていました。私は泣きもせず、ぼんやりした父を見ていました。——あのとき、父は死にたかったんじゃないかと思うんです。せめて私だけでも死んでいたら…… 父も真面目に生きる気持ちになって、母と兄と三人で幸せになれたかも知れないって。

夫婦が暮らす家。木野、入って来る。

木野 四月から契約社員になることにするよ。社会保険もあるし、ゆっくり治療できるでしょ。

ミミ 大丈夫？

木野 なにが？

ミミ 毎日会社に行くんでしょう？

木野 そりゃそうでしょ。

ミミ ……。

木野 大丈夫だよ。心配しないで。

二〇〇一年・初夏。

ミミ、部屋に横たわっている。心の中心にとてつもなく大きな不安が棲みつき、自分はこの世界に存在してはいけないような恐怖に脅かされている。生きるエネルギーが枯渇したようにぐったりとして、声もか細くなっている。

木野、優しく呼びかける。

木野 ミミ、サキちゃんが来てくれたよ。上がってもらうね。

ミミ (激しく首を横にふる)

木野 どうした？

ミミ 会えないよ。

木野 どうして？ サキちゃんだよ。

ミミ あたし、臭いから。

木野 そんなことないよ。

ミミ ずっとお風呂に入っていないんだよ！ 髪なんてべとべとだし、皮膚だってほら！ こうやってこすると粘土みたいなカスが出るの。ほら！ 会えるわけじゃないじゃない。

木野 サキちゃんはそのなこと気にしないよ。君たち姉妹みたいなもんじゃない。中学の演劇部から一緒に……

ミミ (激しく拒否)

木野 ……わかった。じゃあ帰ってもらうね。

木野、いったん出て行き、戻ってくる。

木野 これお見舞いだって。

ミミ、小さな花束を目にして哀しみがこみ上げてくる。

ミミ お願いがあります。

木野 どうした？

ミミ 中村に連れて行ってください。

木野 ナカムラ？ お母さんに会いたいの？

ミミ (激しく首を横にふる)

木野 ナカムラに行つてどうするの？

ミミ 四万十川に連れて行つて。お願い……

木野 四万十川に行つたら楽になる？

ミミ わからないけど…… そんな気がするの。

木野 わかった。すぐにはムリだけど行けるように考えよう。

ミミ お願いします。

ミミ、畳に額をつけるように頭をさげる。

【第七場】二〇〇九年・春

夫婦が暮らす家。金曜日の昼過ぎ。

木野 荻窪行ってくる。

ミミ 今日？ 先々週も行ったよね？

木野 サクラ先生からメールあつてさ、なんかかなり参ってるらしいんだよね。
ミミ ……。

木野 そんなこと言っているのかって思うんだけどさ、木野さんと話すと落ち着くっていうからさ。ったく、どっちが患者かわからないよな。

ミミ 精神科のお医者さんは相性が大事だから、何も言わなかったんだけどね。私もカワイ先生に会うまで苦労したし…… でもどう考えてもその先生、医者として好ましくないよね？

木野 君の言う通りだと思うよ。でも精神科って変な患者も多いじゃない。ほんと大変らしいんだよ。ストーカーみたいなことされたりとかさ。

ミミ 家族はいないの？

木野 バツイチで独り暮らし。新一年生の男の子の親権、ダンナに取られたらしい。

ミミ 同情はするよ。でも医療費支払って通ってるのは木野さんなんだから、いつもいつも先生の愚痴聴いて帰ってくるのは、どう考えてもおかしいでしょ？

木野 先生も、いつも申し訳ないとは言ってるんだよ。奥さんにも申し訳ないって。

ミミ 私に？ なんで私に申し訳ないの？

木野 ……。

ミミ それなら友人として、病院の外で会えば？ 医療費払うのおかしいでしょ？

木野 でもまあ、薬はもらうわけだから……

ミミ だから、処方箋代もかかってるわけでしょ。もう一か月に一回でいいのに、割高になるんだよ。木野さんの調子が悪くて通院が増えるのはいいの。でも先生の具合が悪くて、通院を刻んで薬もらうようにするっておかしいでしょ？

木野 でもまあ自立支援で五百円だし……

ミミ 自立支援受けて五百円で済むのは公費が投入されてるからだよね。木野さんらしくないね。

木野 ……。

ミミ その先生、ちゃんと受診した方がいいと思うよ。患者に頼るんじゃないって信頼できる精神科医に相談すればいいじゃない。

木野 たしかに。

ミミ 木野さん、この次からカワイ先生のところ行きなよ。

木野 そりゃ、そうできたらいいけどさ…でも先生言ってたじゃん、家族は一人しか診ないって。

ミミ 私はもう行かないから。木野さんが行けばいい。カワイ先生に引越しのこと話してきた。薬ももう止めることにしたの。

木野 何飲んでるんだっけ？ 今……

ミミ デパス。あと頓服。

木野 大丈夫なの？ 急に止めたりして……どのくらい飲んでた？

ミミ 丸三年。

木野 ほんとに大丈夫？

ミミ わからない。でもそうしようって決めたの。

木野 そうか……カワイ先生、驚いたんじゃない？

ミミ 驚いてた。でも引き留めはしなかった。

木野 そうか……

ミミ 木野さんのこと、すごく心配してたよ。

木野 そうか……とにかく今日は行くよ。約束したし。

ミミ そうだね。ねえ、今月のクレジットの通知見なかった？

木野 さあ……見てないけど。

ミミ ——ほんとに？

木野 ほんとに。

ミミ 知らない？

木野 知らない。

ミミ そう。——晩ごはん、食べたいものある？ カツオのたたきは？ 初鰹。あと焼きそら豆とか…ピ

——スゴはんもいよいよね？

木野 美味そうだな。でもいいよ。哀しくなるし。

ミミ そっか……そうだね。

木野 あなた、離婚してよそでピースゴはんって言っても通じないよ。木野家だけなんだから、たぶん。

ミミ 離婚は…… まだわからないよ。

密度の高い沈黙。

木野 昨日、話そうと思ってたんだけどさ。福岡で暮らさないか？

ミミ、怯えた表情。

木野 違う違う！ 親のそこじゃないよ。同居はしない。それはない。向こうでマンション借りてさ、東京よりは安いし、門司でもいいし。福岡にも雑誌はけっこうあるし、知り合いもないわけじゃないし…… けっこうイケそうな持ち込み企画もあるんだよ。ギャラ安くてもいいって言えば、使ってくれるところはあると思うんだよね。福岡ならコールセンターもあるみたいだし、何とかなるんじゃないかな。

ミミ ……。

木野 今さらなんだって感じだよな。君は何度も福岡に行こうって言うてくれたのに、ずっと拒否してきたから。

ミミ 今さらなんだって感じです。

木野 そうだよな。よくわかってます。でも真剣に言ってる。君だって今の給料でアパート借りて諸々払って、さらに返済していくのは大変だろうし、ちよつとでも安い所に住めば、その分返済に回せるわけだし……

ミミ 意味わからないんだけど。それができれば、今までだって返済できてるはずだよな？ ここの家賃だって更新の度に安くしてくれてるし、木野さんが……

木野 (強く遮る) わかってる。だからだよ。
ミミ ……。

木野 ほんとに今さらだけど、やっぱり誘惑が多いんだよな。誘惑つてのもおかしいけど、今までの付き合いもあるし…… この前もカズマが来たじゃない？ きみが3千円出せないっていうから……

ミミ 五百万の借金がある夫婦が、五体満足、ただ働きたくないってだけの人に、働かないのがポリシー

っていうオヤジに3千円あげないでしょ？

木野 カズマはただのオヤジじゃない。ロックンローラーだぞ！

ミミ ……。

木野 とにかく手ぶらで帰せないっていうか、帰れないからさ、あいつ……

ミミ 結婚指輪、質入れしたんだよね。

木野 ……。

ミミ (可笑しそうに) やっぱりそうなんだ。

木野 キノー 電車賃恵んでくれよー って言われるとさ…

ミミ カズマさんじゃなければね、三千円くらいあげたよ。カズマさんだから拒否したの。わかってる？
木野 わかってると思う。

ミミ 昔はね、大学に棲みついて、色んな人に煙草代とかラーメン代とかもらって暮らしてるのも面白い
って思ったよ。木野さんが言うように、あそこまで卑屈にならずに人にタカれるのはすごいっていう
のも、わからなくはない。

木野 憎めないよな。

ミミ でも木野さんが肝硬変で、死にかかってて、収入もまったくなって、貯金どころか借金しかないっ
て知ってても、あの人タカれるかな？

木野 ……。

ミミ 友だちなら、思いやりは必要でしょ？ ロックンローラーでも。ちゃんと話さない木野さんが悪い
と思うよ。

木野 そうだな。

ミミ だいたいカズマさん、埼玉のどつかにちゃんとした実家があって、学校の先生してたお母さんに時々
おこづかい貰ってるんでしょ？ 今までの分、木野さんがタカつてもいいくらいだよ。

木野 だからさ、きみの言う通りなんだよ。だから、そういう知り合いのいない所に行った方がいいと思
ったんだよ。

ミミ ……。

木野 高木さんだって、工藤社長だって長い付き合いで、俺、ずいぶん無理も聞いたよ。新婚の頃にギャ
ラが遅れて、きみにもずいぶん我慢してもらってさ、あの時はものすごいしんどかった。それでも文

句ひとつ言わずにやってきたけどさあ、俺が死にかけたって聞いても顔も見せやしない。見舞いも寄こさなかったもんな。さすがの俺も、つくづくお人よしはバカのうちだと思ったよ。——お人よしはバカのうちって、名言だよな。きみのお父さん。

ミミ ……。

木野 考えてみて欲しい。今さらだと思うのは当然だし、わかってるけど、考えてみてください。門司でも柳川でも、きみの好きなところでやり直したい。(腕時計をみて)もう行かなきゃ。帰ったらまた話そう。よろしくお願いします。

木野、深々と頭を下げ、出かけようとするが、戻ってきて「ガラスの動物園」の文庫本を差し出す。

木野 これは持ってかなきゃ。

ミミ、『ガラスの動物園』を見つめている。

【第八場】二〇〇二年・初夏 ここに住めたらいいのにね

ホテルペンシルバニアの部屋。夜。

木野、新しいビールを開ける。

ミミ まだ飲むの？ ちょっと飲みすぎじゃない？

木野 こっちはビールが安くていいよなー ごめん、これでお終いにするから。

ミミ 明日早いから心配しただけ。飲めばいいよ。エンパイアステートビル、登ればよかったのに。行きなかったんでしょ？

木野 一人で行ってもな。

ミミ ごめんね。高いところ苦手。高速エレベーターも耳痛くなるし。一分で八十階は恐ろしい。

木野 おみやげ揃った？

ミミ うん。会社の人みんなチョコにしちゃった。ハーシーズは安くていいね。

ミミ、木野の側からだを寄せる。

ミミ グラウンドゼロ、行ってよかった？

木野 きみは？

ミミ 私はよかったよ。

木野 ならよかった。

ミミ 私、靈感ってあると思ったことないけど、ちよつと経験したことない感覚だった。

木野 聞きたいそれ。話して。

ミミ 駅から地上にあがって、すぐ埃っぽかったでしょ。予想はしてたけど、そこへ向かってどんどん埃っぽくなるのかと思って不安になったのね。ほら喘息あるから。

木野 うん。

ミミ ここで発作出たら困ると思って……でもそこに着いたら、その中心はむしろスッキリしているみたいだった。

木野 うん。

ミミ 腕の汗腺が開くような感じでふつつつしてね……

木野 鳥肌が立つみたいなの？

ミミ 違うの。鳥肌ってやっぱり立つわけじゃない？ そうじゃなくて開く感じなの。皮膚の穴が開いて、そこらにあるものと共鳴していくような感覚なの。

木野 うん。

ミミ 遠くの方で何か聞こえているような気がして、初めは街の音かと思った。でも違う。周囲というよりは上から、天から小さな音が降ってくるような感じ。よく耳を澄ますと、人の声のような気がしたの。

木野 人の声？

ミミ そう。細かく粉碎された人の声が、風に舞っているみたいなの……

木野 すごいな――

ミミ ……。

木野 茶化してるんじゃないよ。そんな風を感じる力がすごいと思って、感心してる。
ミミ あそこに立って『幸福な夢』のこと、考えてた。

木野 そうじゃないかと思った。

ミミ 大げさかも知れないけど、今あれをやらなきゃって、やりたいって思った。

木野 そうか。

ミミ — やってもいい？

木野 いいんじゃない。

ミミ 一年くらい、しつかり時間をかけて準備しようと思うの。

木野 いいんじゃない。

ミミ お父さんたち気を悪くするよね。

木野 気にかんすることないよ。

ミミ もう演出はやらない。制作に専念して…… それなら仕事も一週間くらいの休みでなんとかできる
と思う。

木野 俺もできるだけ協力するよ。

ミミ チラシ作ってくれる？

木野 いいですよー

ミミ ありがとう。でも木野さんは、自分の体のことを一番に考えてね。

木野 わかってる。

ミミ (微笑む)

木野 あのだ、『オペラ座の怪人』どうだった？

ミミ 面白かったよ。

木野 え？

ミミ お客さんがすごく面白かった！

木野 なんだよ。

ミミ 色んなお客さんがいたね。大家族で来てた人たち、プエルトリコ人かな？ まるで運動会みたいな
騒ぎだったね。あとスコットランドの正装した紳士がいたでしょ？

木野 キルトね、初めて間近で見た。
ミミ ミュージカルはもういい。次はストレートプレイを見たいな。
木野 そうだね。

沈黙。

ミミ 帰りたくないね。
木野 そうだね。
ミミ ここに住めたらいいのにね。
木野 英語話せないの？
ミミ 日本だって、ほんとのことは話せないよ。
木野 そうだな。
ミミ せめて半年くらいいられたらね、すっかり元気になるかも知れないのに。
木野 また来よう。
ミミ ぜったい来よう。

二人、横になりながら会話し、やがて消灯する。

木野 次はどこ行きたい？
ミミ エッサ・ベークル！ ニューヨークで一番美味しいんだって。木野さんは？
木野 俺はオイスタバーに行ってみたい。
ミミ いいね！ 行きたい！
木野 やっぱシャブリかな。
ミミ あとイサムノグチね。
木野 ちよつと遠かったね。
ミミ あとガラスの動物園！ 『ガラスの動物園』を観たいな。

真夜中。木野、眠っているミミを見つめている。

やがて、指をミミの頸にかける。

木野、静かに、ゆつくりと、ミミの頸に両手をかけようとするが……

ミミ　きのさん……？

木野　大丈夫だよ。おやすみ。

【第九場】二〇〇四～二〇〇八年　爆発したんだ

二〇〇四年・一月末の夜。

ミミ　木野さん、明日からもう劇場には来なくていいよ。家でゆつくりしてて。

木野　行くよ。何かやることあるかも知れないし。

ミミ　……来ないで欲しいの。来ないで欲しいっていうお願いなの。

木野　どうして？

ミミ　みんな気にしてるんだよ。木野さんが普通じゃないって、気になってるの。

木野　気にしなきゃいい。

ミミ　そういうことじゃないでしょ！　毎日お酒の臭いプンプンさせてるスタッフがいたら、気が散るでしょ？　旦那さん大丈夫なの？　って言われてるの。

木野　そうか。

ミミ　すごいいいチラシも出来たし、パンフも出来たし、ありがたいと思ってる。賄いも手伝ってくれて助かったよ。みんな喜んでた。でも明日から本番で、もう大丈夫だから家にいてください。

木野　わかった。

木野、出て行く。

ミミ　木野さんは千秋楽まで欠かさず劇場に来た。

二〇〇四年・初冬。ミミ、電話をかけている。

ミミ　——お義母さん、学さんにお酒を止めるように話してもらえませんか。——そんな悠長なこと言っ
てられないんです。——お義父さんやお義母さんが考えているよりは、もっと深刻な状況だと思いま
す。主治医の先生から、飲んだ分だけ寿命を縮めるって言われました。——入院して治療した方がい
いって言われたんです。でも学さんがどうしても嫌だって——みつともなくないです。病気なんです
から。——反対ってどういうことですか？

二〇〇五年・春。ミミ、眠っている木野を見つめている。

木野　（気配に気づいて）どうした？

ミミ　いい病院見つけたよ。

木野　入院はしないよ。

ミミ　普通の病院じゃないの。ちょっと遠いんだけどね、家族も一緒に入院できる施設があるんだって。
海の近くでね。

木野　……。

ミミ　ね、一緒に行ってみよう。

木野　——君、仕事はどうするの？

ミミ　辞めるしかないだろうけど、でも大丈夫。コールセンターはいっぱいあるし、今のセンター、研修
がすごく厳しかったからね。どこへ行っても通用するって言われてるの。

木野　……。

ミミ　ね、二人一緒ならいいでしょう？

木野　それはできない。

ミミ　どうして？

木野　とにかくできない。嫌だ！

木野、出て行く。

二〇〇五年・秋。ミミ、電話をかけている。

ミミ お母さん、ミミです。学さんのことなんですけど、お酒やめることできていないんですよ。——
焼酎だと二日で一本くらいです。乱れたりはしません。——強くても依存症にはなりませんから。今
治さないと大変なことになると思うんです。それで、私も一緒に入院しようと思うんです。そういう
施設があるんです。一人だと見放されたように感じるでしょう？ だから奥さんとか親とか、家族が
いっしょに寝泊まりできる施設があるんですよ。——許すとか許さないとかの問題じゃないんです
よ！

二〇〇六年・正月の夜。二人、家に帰って来る。

ミミ どうして？

木野 ごめん。ほんとに申し訳ない。

ミミ 謝るくらいなら、どうしてあの場で言ってくれないの？

木野 ……。

ミミ 木野さんも、お義父さんも何も言わないなんて、おかしいよ！

木野 お袋、たまにああいうことあるんだよ。

ミミ 私に来て欲しくないなら、最初から呼ばなきゃいいじゃない！ 呼ばれて行ったのに私の席もお皿
もお箸もなくて…… ヒナちゃんが「お姉ちゃんのお箸もってくるね」って言うってくれなかったら私、
発狂してたかも知れない。お義母さんはひどいけど、木野さんとお義父さんはもつとひどいよ！ そ
ういうの、木野さんがいつも批判してる、鈍感な傍観者っていうんじゃないの？

木野の携帯電話が鳴る。

木野 もしもし？ —— ああ…… ちょっと待って。

ミミに携帯電話を渡そうとする。

木野 お袋が君に謝りたいって。

ミミ ……。

木野 頼む。

ミミ、どうしても体が拒否してしまう。

木野、あきらめて出て行く。

二〇〇七年・初冬。

ほっと息をつくように陽だまりの温かさを感じていたミミ、ふと戸外の異変を感じ取る。

木野、ここでは向かいの家の住人、ペットボトルの主として、その窓を開け、ペットボトルの蓋を開け、その液体を空中に散布する。

強いアンモニア臭が漂い、強烈な刺激がミミに襲いかかる。

時間経過。夕刻間近。ミミ、ぐったりと横たわっている。

木野、帰って来る。

木野 どうした？

ミミ バクハツした。

木野 ……。

ミミ 引越しよう。こんなところにいちやいけない。ここから出よう。まだ異臭が漂ってるでしょ？ す

ごいアンモニア臭…… この家あちこちに隙間があるから、窓閉めても防げないんだよね。大丈夫？
気持ち悪くない？

木野、向かいの家の窓の柵にあるペットボトルを確認する。

ミミ　すごい刺激で目が痛い。しばしばするでしょう？　何ともない？　感じない？
木野　……。

ミミ　ね、引越ししよう。あたし探すから、いいところ見つかるから。

木野　爆発したんだ……！

ミミ　それから私はインターネットで物件を探し、陽当たりのいい一軒家を見つけ出した。木野さんは一緒にその家を見に行ってくれた。調布駅から徒歩二十分、ほんとうに久しぶりに手を繋いでゆつくりと歩いた。途中にロウバイの花がたくさん咲いていて、月の雫を凍らせたような透き通った花びらが真つ青な空に輝いていた。木野さんはその花がとても好きだった。

木野　ロウバイって蠟の梅って書くけど、ほんとに梅じゃないんだよな。

ミミ　木野さんはすっかり痩せてしまい、ときどき内臓から液体がこみ上げてくると、生きていたものが朽ちていく臭いがした。それでも男の人にしては小さいその掌からはたしかな温もりが感じられて、このままずっと……

木野　ごめん。俺もう引越しはムリだよ。

【第十場】二〇〇九年・春

夫婦が暮らす家。土曜日の夕方近く。

ミミ、佇んでいる。

木野　ただいま。君の言う通り病院変えることにしたよ。もう荻窪へは行かない。カワイ先生の所へ通うよ。大丈夫？　疲れたんじゃない？　夕飯、ピザでも取ろうか？　そうそう、ノートブックに入ってる書きかけの戯曲、いちおうUSBメモリーに入れて渡すね。使い方も書いておくから。

ミミ　話があるの。

木野　うん。

ミミ　座って。

木野　じゃあその前に珈琲入れようかな。飲むでしょ？

ミミ　飲まない。

木野　――どうした？

ミミ、クレジットカードの明細を差し出す。

ミミ　これ、説明してくれる？　机の引き出しに入ってた。

木野　……。

ミミ　プレイステーションスリー三台。木野さんが買ったんだよね？　私のクレジットカードで。

木野　……。

ミミ　どういうことか説明してくれる？　木野さんに渡してた家族カードを解約したから、どうしても必要なときは私のカードを使っていいたったけど、無断で使っていいたは言っていない。まず相談してねと言ったよね？

木野　……。

ミミ　で、そのプレイステーション三台はどこにあるの？　見せて。

木野　ここにはないです。ごめんなさい。

ミミ　ちゃんと説明して。木野さんがネットで買ったんだよね？

木野　はい、買いました。

ミミ　それで品物は？

木野　もうありません。

ミミ　どうして？

木野　売りました。

ミミ　三台とも？

木野　はい、三台ともです。

ミミ　残念！　遊べないんだ。

木野　……。

ミミ　つまりこういうことかな？　木野さんは現金が欲しかった。私の留守に私のクレジットカードでキヤッシングしようとしたけど限度額いっぱい借りられない。で、ネット通販で売れそうなゲーム機を買ってすぐ転売して、現金を手に入れた。

木野 そういうことです。

ミミ 14万9400円必要だったんだ。

木野 いや、定価じゃ売れないから、十万円足らず。

ミミ この言葉嫌いだから使わないようにしてたけど…… ムカつく。

木野 ごめんなさい。

ミミ ——暗証番号教えてたっけ？

木野 いくつか試して、結婚記念日を入れたらヒットした。

ミミ (自嘲気味に) 私のことよくわかってるね。

木野 ごめん。

ミミ これ犯罪だよ。わかってる？

木野 ……。

ミミ いったっけ？ わりと最近、うちの母親がお金貸してって言ってきて、貸さなかったら詐欺に引っかけたでしょ。憶えてる？

木野 憶えてる。

ミミ 五十万円融資します。でもそのためにまず保証金として五万円振り込んでくださいってやつ。あんたが貸してくれなかったけんって散々責められて、吐きそうなくらい嫌な気持ちになったけど、百倍マシだったね。

木野 ……。

ミミ で、どうやって支払えばいいの？ それでなくても毎月払い切れない金額をどうにかこうにか払ってるんだけどね。この金額、どうやって払えばいいの？

木野 何とかする。

ミミ 何とかできるなら最初からすれば？ 福岡から借りてくれる？

木野 それはムリ。

ミミ、 木野に座布団を投げつける。

ミミ 福岡なんか行かない。行けるわけがない。もう無理だよ。——どうして？ 父親とおんなじ。なん

で？　こんなこと繰り返してたら、いつか木野さんを殺すかも知れない……
木野　殺してくれ……！

ミミ、座布団で木野を叩く。

ミミ　――家族揃ってどこまで人を馬鹿にしたら気が済むの？　ほんとにひどいよね。木野家はおかしいよ！　木野さんが退院して私がうつ病になって、あなたの親が怒ってるという。夫が大病になったのに妻が働けないってどういうことだって怒ってるって……でも私ずっと働いてきたよね？　結婚してあたしが働いてなかったときは何日ある？　それって怒ること？

木野　ごめん。

ミミ　アルコール依存症を治すために私がいっしょに入院すると言ったら、あなたの親はとんでもないって言った。そんな可哀そうなことできないって。ミミさんはヒドイって。大げさだって。その結果、木野さんはお酒を飲み続けて、こんな風になったんじゃない。それで肝硬変になって死にかけたのにお見舞いにも来ない。ミミさんに任せるって。そんな都合よく任せられても困るのよ！　木野さんはもう前みたいには働けないし、木野さんだけでも破産宣告したいって言ったら、それもダメだと言う。世間に顔向けできないって。バカなんじゃない？　ねえ、バカなんじゃない？　あんたたちのいう世間って誰？　どこ？　その間にあなたは私のカードでお金を借りて、借りられなくなったらショッピングして、転売して現金に替えるって……どういうこと？　それゼーんぶ私の名義なの。わかってる？

木野　はい。

ミミ　どうせ破産しなくたって自分が死ねばチャラになるって思ってるんでしょう？　私じゃなくて木野さんが思ってるのよ！　うちの母とおんなじ！　でもあたしはそういう生き方は嫌なの！　したくないの！　私は木野さんが残した借金を返すよ。私の人生はそれで終わりよ。今すぐ離婚したって私は三百万返さなきゃならないのよ！　月に五万返して年に六十万、どんなにがんばっても五年はかかる。五十近くなつて、ようやくまた芝居のことを考えることができる。もう遅すぎるかも知れない。

木野　大丈夫だよ。

ミミ　うるさい！　でも書くことはやめない。どうしてかわかる？　そうしないと自分が生まれた意味がないからよ。意味なんてなくてもいいのかも知れない。でも書きたいことを描かないと。あたし本気

よ！ 五十になって芝居書いて、東京に住めなくなって、そしたら高知に帰るわよ。四万十川に帰るわよ！ 四万十川の河原に掘っ立て小屋建てて、ヘンな女が棲みついてるって言われても構わない。ここで何してるんだって言われたら、ギョク書いてるんだって言ってやる！ それで行き倒れになつて、四万十川に浮いてたら本望よ！ こんなところで息をひそめてるより百倍マシ！

木野、笑いだす。

木野 ごめん、バカにしてるわけじゃない。君ならやりかねない気がして…… やっぱ君は強いんだよ。

沈黙。

木野 なんで戻って来たの？

ミミ ……？

木野 あの時、サキちゃんのとこからなんで戻って来たの？

ミミ ……。

木野 戻らないつもりだったんだよね？ 何かが変わらなければ戻れないって言って君は出て行った。でも半年経って何も変わらないのに戻って来た。ごめん、戻って来てもいい？ って… 君が帰って来たのは嬉しかったけど、正直戸惑った。どうして？

ミミ —— 共存だって言われたの。

木野 キョウイゾン？

ミミ お互いに依存し合って生きてるって……

木野 共存ね。

ミミ 別居してるのに今までと同じように集まりに来るのはおかしいって言われて… 木野さんはあんまり人前に出さない方がいいとか言われて……

木野 人をバケモノみたいに…

ミミ 辛かったの。誰も味方がいないような気持ちになって怖くなって… でもどこにも行くところがなかったの。

木野 ほかには？

ミミ 家族がアルコール依存になるのは、側にいる人の責任もあると思うって言われたの。

木野 あなたはどう思うの？

ミミ 責任があるって思ってたよ。だから自分に出来ることは全部やろうって思った。でももうやり尽くしたと思う。もうできることがなくなっちゃったの。

木野 いるだけでいい。そばにいてくれるだけでいいよ。

間。

ミミ わかって言ってる？ 側にいるだけでって、本当にその意味がわかってる？

木野 ……。

ミミ 私の感覚ではね、それはものすごく罪深いことなの。

木野 ……。

ミミ 今の木野さんはね、ゆるやかに自殺してるんだよ。そっちへ進むと命が削られるとわかってるのに、そっちへ向かっていく。私はそれを止めることが出来ない。側にいて見守ると言えば聞こえはいいけど、それって自殺ほう助と同じじゃない？

木野 それは違う。

間。

ミミ 木野さんはうちの父親みたいに暴力的ではないけどね、そんな体になってまでお酒を飲んでいるのを見ると、色んな所にお酒を隠してまた飲んでるんだってわかると体が痛い。痛くて苦しい。――私が自惚れてた。絶対なんとかできるはずっていう私の思い上がりのせいで、こんなところまで来てしまった。こんな遠くまで… もっと早く手を離してあげればよかった。

木野 ……。

ミミ 私は木野さんを救うことはできない。でも、私は私を救うことはできるかも知れない。それをしなきゃいけないと思うの。

間。

木野　——そうだな。

ミミ　……？

木野　そうだよ。君のせいだよ。俺がこうなつたのは君のせいだよ。君は人を追い込むんだ。君の正義を振りかざして追い詰めるんだよ。俺だけじゃない。だから君のあの人だって逃げ出したんだ。追い詰められて逃げ出したくなるんだよ。だから、けつきよく君は一人になるんだよ。だから……

ミミ、ポロポロと涙をこぼしながら、木野の言葉に隠された本当の意味を探している。

木野、出て行く。

*

日曜日・未明。

木野、眠っているミミを見つめている。

やがて、両指をミミの首にかける

木野、静かに、ゆっくりと、ミミの頸に両手をかけるが、やがて手を離す。

ミミのうなされる声が聞こえてくる。

木野、ミミの名前を呼びながら起こそうとする。

目を覚ましたミミ、子どものように怯えている。

木野　大丈夫。夢だよ。

ミミ　お父さんが……

木野　またお父さんか……

木野、しっかりとミミを抱きしめる。

ミミの手が木野を求め、二人はしっかりと強く抱きしめ合う。
やがてミミが安心したように眠ると、木野は持っていたなにかをミミの側に置いて去っていく。

*

朝がやって来る。

ミミ、目が覚め、自分がどこにいるのかを確かめる。

ミミ、側に置かれた『ガラスの動物園』の文庫本に気がつく。

ミミ、起き上がり、木野の姿を探す。

木野の姿はどこにもいない。

打ちひしがれるミミ、やがて駄々をこねるように叫ぶ。

ミミ 行きたくない。行きたくない。一人になりたくない。怖い。行きたくない！ここにいたい！木野さんと一緒にいたい！一緒にいたい！

追憶の灯りの中に、木野の姿が現れる。

木野、酒を飲んでいいる。その姿を見つめるミミ。

ミミ 大切な友人で大切な仲間だったサトウくんが突然死んだのは二〇〇一年の夏でした。ひとり部屋で亡くなっていて、自然死ということでした。その頃の私はひどく調子が悪く、一年近くほぼ寝たきりのような生活だったのですが、サトウくんの死という、あまりに衝撃的な出来事が眠っていた神経をたたき起こしたかのように、活動を始めました。私と木野さんが初めてニューヨークに行ったのは、その翌年、二〇〇二年の五月の終わりでした。もしかしたら、もうここへ戻ることはないかも知れない：そんな心境で、この家を出ました。でもエンパイアステートビルに入ったのに、私は逃げ出してしまった。――私たちが最後にニューヨークに行ったのは二〇〇五年の夏のことです。そのときは、確実に、お互いこれが最後のニューヨークになるだろうと感じていました。私はブロードウェイで上演される『ガラスの動物園』のチケットを予約して、飛行機のなかでずっと『ガラスの動物園』を読

んでいました。——英語がわからなくても全部覚えちゃえばいいんだから！

ミミ、劇場の椅子に座っている。

ミミ その夜の席は、舞台と同じ高さくらいの位置のちょうど真ん中。私の一番好きな席です。演出はデヴィッド・ルヴォー。アマンダ役はジェシカ・ラング。あの日、今見ている芝居からエネルギーを得て、自分のからだに新しい力が満ちていくのがわかりました。

ミミ、ニューヨークの街角を跳ねるように歩く。

ミミ わかったの！ どうしてうまく書けなかったのかわかったの！

木野、微笑みながら酒を飲んでいる。

ミミ 今までセリフが一番大事だと思ってたの。さっきの舞台、幕が上がったらセントルイスの街のにおいがしたの。ミシシッピ川とミズーリ川の合流する街のにおい。油と煙の混ざった少し重苦しい風も感じた。もちろんセリフは大事だけど、それだけじゃダメなのよ。描こうとしている世界全体の空気を伝えることが大事なんだと思う。

木野 （呟くように）このまま二人で、いられるだけここにしようか……？

ミミ 私、早く帰りたくなっちゃった。今までよりうまく書けるような気がするの。

木野、微笑みながら酒を飲んでいる。

ミミ その夏の終わりから秋に向かって、私は仕事から帰って食事と睡眠以外はずっと書き続けていました。金曜の夜は土曜の朝方まで、土曜日は日曜の朝方までずっと書き続けていました。

ミミ、二階の机に向かい、戯曲を書いている。

木野、一階で酒を飲んでいる。

ミミ、降りてくる。

ミミ 私は朝まで起きてると思うけど、木野さんはちゃんと眠ってね。一緒に起きてなくていいんだからね。あんまり飲み過ぎないでね。

木野 わかつてる。でも、そろそろお風呂にも入った方がいいよ。

ミミ そう？ 臭う？ じゃあ明日入る。

木野、酒を飲んでいる。

ミミ (階下へ向かって) まだ起きてるのー？

木野 もう寝るよ。

ミミ おやすみなさい。

木野 おやすみー

木野、酒を飲んでいる。

ミミ 私が書いている間、木野さんはずっとお酒を飲んでいる。早く終わらせないと木野さんが死んじやうかも知れない。早く！早く！

木野、飲み続けている。

ミミ、再び書き始める。書きながら、木野の思いが、嫉妬が、執着が体にまとわりついて離れないような苦しい気持ちになる。

ミミ、たまらず駆け下りてくる。

ミミ もう寝るって言ったよね？ 起きててもいいけど、ずっと飲むのは止めて。からだに良くないよ。
木野 ごめん。もう止めるから。

ミミ 心配で落ち着いて書けないよ。

木野 ごめん。でもなんか嬉しくってさ。

ミミ 何が？

木野 君がまた書けるようになったことがさ… 寝たきりだったのにな。

ミミ

木野 よかったな。ほんとよかった。

心底うれしそうな木野の微笑みが、ミミの胸に突き刺さる。

ミミ ありがとう。

木野 もう寝るから心配するな。大丈夫だから。

ミミ 大丈夫？

木野 大丈夫。

ミミ おやすみ。

木野 おやすみ。君も無理するなよ。

ミミ うん。

木野、酒を飲み続けながら、やがて静かに横たわる。

*

ミミ、どうして出て行かなくてはならないと決意したのかを思い出した。
やがてミミが旅立つとき、木野の姿も消えてゆく。

終